

## 親の立場から

瀬川良夫

親の立場から、小学校で、入学時に、選抜の方法の一つとして智能検査を実施することの、教育的可否を考えよという意味に、執筆の課題を理解して、筆を進めてみる。

さて、親の立場から、と申しても、私の場合、なる程四人の子の父親であり、而も年上の三人の子は、既に小学校に進ませ、来春また一人が就学する予定の幼児を家に持っている、その点では一応、この問題を考えるのに適当な親達の中の一人であるかも知れぬ。ところが、気になるのは、実は自分は、この入学時智能検査実施の可否について、曾てあれこれと迷った経験がないので、私とは反対に恐らくおいでであろう、その事に賛成される父兄の方々、或はまたその為にテストの受検準備まで自分のこどもにさせる一部の親たち

の気持が実感として体験出来ないことである。つまり、賛否両論の何れの側の親の気持をも、この場合公平に代弁するのがほんとうのような感じがするのに、私のような考え方をする親の立場だけが、この問題についての「親の立場から」の代表になつてしまふのではないかをおそれるのである。しかし考え直してみれば、その事は編集の上の問題に關することであつて、私としては、もつと気楽に、一人の親の立場からという気持で、親としての考え方の一つを述べればよいのだと、割り切り、自分の場合を誌すことにさせていただく。

区立の小学校では、入学時に簡単な智能テストを実施することはあつても、そのテストの結果によつてその学校に入学出来ないという不幸なこどもの問題は出て来ないところが、私立の小学校や特別の公立学校の小学校の場合、選抜のための方法の一つに、この智能検査が用いられ、しかもそれに、他の方法による判断よりも、かなりの重点が置かれて、こどもたちの運命を定める判定手段となる。そこでそういう学校を受けさせる親たちが真剣にテストの準備を幼稚園側の教育の内容にも期待するというわけになる。こどもをいれさせたいと思う小学校なのであるから、そこで行われる選抜の方法に就て、その教育的可否を考えてみるゆゑ、とりもななく、それへの適懸の方法についてあれこれと心をくだき、背伸びをして、頭ガツチンの、小うるさい質問癖のこどもにわが子を仕立てていく経路も、一応無理のない親ごころとも思える。従つて、この場合、小学校の側

が、選抜の方法として、智能テストを行わず、他の方法によって選抜は行い、入学後に、指導の上の必要上、そうしたテストも行い活用するとなれば、親はおそらく智能テスト問題集を手に入れての詰め込み家庭教育をしないであろうし、幼稚園側にもそれへの努力を切望して、園側で考えている、幼児教育のカリキュラムを、或る場合乱してしまうという問題も生じないわけである。つまり、親たちは、智能テストをやってほしいと、小学校側に迫って実施させているわけではない。それなら、どの部面の人たちがその事の実施を定め、その際、どのような必要性からそれを行い、またその事から生じる色んな教育的問題について、どのような検討や反省を行つていられるかが、問題の核心の中の一つになる。

いま、私自身、実施する側に立つ者として考えてみれば、余り智能の低い子に入られると、教えるのに手こずるから、ある水準以上の者を探っておきたいという考えが、究局な理由になるのではないか、と思う。しかし、私はこの理由にこそ、この智能検査による選抜の可否についての根本的な問題がひそんでいると思う。第一に検討したいことは、所謂「頭のすぐれてよい児」だけが、義務教育の一環である小学校の教育対象として選抜され、そうでない児は、その小学校の教育対象でないとして取り除けていくという、考え方なり立場なりは、いったい、どのような教育観や教育理論の上に立つものであるのだろうか。所謂英才教育をするために、そうするのだという考え方は一応成立つ。しかしである。普通の、各地域の公立小

学校の先生になる学生を養成する系統の大学の附属小学校が、特別の者だけを集めて教育し、即ち普通よりすぐれた智能の児という特別の条件で、新しい教育方法を実験し、そこで教育実習をも行わせ、またその研究の結果を、結局は標準的なより所にして、地区の学校の教育研究に対しての啓蒙的役割を演じていくというのは、どうも筋が通らないのである。英才群を実験台としての、学級経営や、各教科の学習指導方法が、如何に整然としたカリキュラム或は指導の技術として研究発表されようとも、それらの研究成果は、普通の小学校、つまりもつと出来ない児どもや、その他様々な条件の教育的問題児をそのままにあずかつて教育している、各地域の先生たちにはピンと来ないのである。これが、モデルスクール乃至指導的役割を持つ学校というか、兎も角中心的な研究校としての附属小学校の本来の姿であろうか。因みにこの場合、公立校の教育理念や方法にあきたらず、経済的にゆたか或は英才のみといった、特別な条件の児たちだけを集めて教育するという私立学校の場合は、はつきりと建前を特別なものとして前面に出して行うのだから、話はおのずから別である。

第二の点、選抜の方法に智能検査を重くみるというところに、相変わらず、古い、主知主義的な人間の価値観や、教育理念がうかがわれる。おそらく、選抜以後の教育の内容も知識的にグングン伸びる子を、他のいろいろな資質や能力よりも、「優秀な人間」として考え、その方向に偏って力点がおかれた、昔のような教育目標の教育

が行われなければ幸である。

以上をいま一度積極的に言い直してみよう。頭のよくない子もい子も、その他色々な条件の子を、地域の小学校のように無差別に入学させて教育することこそ、新しい教育理念による、人間育成のための、従ってまた実践を通しての啓発的な、新しい教育方法や技術が生み出される、モデル校としての大学附属機関の小学校の在り方ではなからうか。そのためにはその入学選抜の方法は、身体虚弱者も、智能的低格者も、その点で、少しも入学に關しての不利者と見なされず、一率にガラガラポンのクジビキによるという選抜の方法によるのが、本来の趣旨に副うものではないのであろうか。

最後に、親自身の問題として、このテストにわが子を応じさせる、させないの態度決定に際して、反省すべき問題を考えてみたい。

幼児が、小学校に入学するという場合、これは小学生が中学校に進む場合とちがって、本人自身が、自分はどここの学校に行きたいと志望する事情のものではない。テストを受け不幸にして、結局本人も入りたい気持ちになっている小学校に入れないという結果になったとき、その時に持つであろう劣等感の後々への影響については、どのように考えるのであろうか。人生はある意味においては競争であり、失敗は成功の基であるとか、そうした、自分の希望の挫折に際して再び立上っていく気力のようなものを、六才の幼児に、それ程高い水準に期待出来るのであろうか。自分の考える力のためすような試験をされ、その結果、そこに入らたら、すばらしいい

ものを買つてやると約束されていた学校から閉めだされて、そのすばらしくいいものを買つてもらふチャンスを失い、同時に父母たちのガツカリした顔つきを見せつけられる時、六才の幼児は、既に、また不当にも、自分の能力について、何かを疑い、以後一種の気おくれを感じずにすむものなのであろうか。そうした心配は決してありえないという保証もないまま、私たちはもつと安心のいく方法をえらぶべきではないか。つまり、母子ともなで、公明に、こどもたちのジャンケンと同じ原理で、ガラガラボンという非情の器械の運のきめ方で、入学可否の運命が定まるものとすれば、本人の所持の上での、そうした精神的傷害の心配の可能性は全く消えさるわけではある。それにしても、親たちは、どういう考えで、テストのために、六才の或は五才の幼児のうちから、家庭教師をやとい、或はしばしば幼稚園の先生に頼んで、テストの練習をさせ、その上、不幸にして入れなかった時以後のこどもの気おくれの危険まで冒して、わざわざ特別のそうした小学校に入れようとするのであろうか。資本制社会興隆期以後のぬけ馳け出世主義の個人主義と、こどもの感情や幸福よりも、むしろ親の見栄が先に立つ封建的な親中心の児童観が、その意識されてはいないが、真の動機だときめつけるのは、少し言いすぎの独断であらうか。親はいま少し、こどもはこども乍らの感じる心や、幼児という時期での精神の在り様を、もつといたわり、尊重してあげるべきではないか。つまり、いい学校だけれども、智能テストで入学の可否をきめるのならば、受けさせる

まいとするだけの見識や批判性を持っていいのではなからうか。

以上、言葉はととのわなかったけれども、実施する側は、いまだ、選ばれた特別の条件の者だけの児童集団を教育研究及び教育そのものの場とすることから生ずる、そこでの成果の適用範囲の限定化について反省し、それと共に、その際とられる入学試験の方法が父兄たちに、相変らずの主知主義的な人間価値観を助長する方向に効果的に働いてしまう、教育的影響について、再検討されることを切望して、筆を擱きたい。(青山学院大学文学部教授)

## 小学校の立場から

自由募集の小学校にはいるための  
準備教育は子供のためになるか

武 田 一 郎

### 1 テストを行う自由募集の小学校

ここでいう自由募集の小学校とは、一般の公立小学校ではなく、

私立の小学校とか、国立大学の附属小学校のように、入学させる子供を募集して決める小学校のことである。多くの場合、これら自由募集小学校の志願者数が、入学させようと思う子供の数を超過するのである。そこで、何かの方法で、多数の志願者のなかから、一定数の子供を選抜しなければならないことになる。ところで選抜のしかたにはいろいろある。たとえば志願者の受付順で決めるとか、抽選で決めるとか、テストをして決めるといような方法がある。

一時に志願者が殺到することもなく、かつ、志願者の数もそんなに多くない学校なら、受付順による方法もよからう。しかし、願書の受付期間が十日も二十日も、ときにはそれ以上もあるのに、受付の第一目めに早朝から何百人もつめかけるところでは、とても受付順というわけにはいかない。そこで抽せんとか、何かのテストをしなければならぬということになる。国立大学の附属小学校のなかにも、抽せんだけで決めるところがある。しかし学校によっては、特別の研究のためとか、教生の実習に伴ういろいろな都合などから、テストを行って決める場合が多い。もっとも国立大学の附属小学校では、テストだけで決めないで、テストの前か後に、抽せんを行うところが多い。テストは、時に、頭の良い子供、つまり知能の低い子を選ぶために用いることもある。しかし多くは、知能の比較的高い者を選ぶのに用いられる。最初にテストをしてから抽せんをする方法と、その逆の方法とを比べると、前者のほうが、知能の高い子供はいえる可能性が多いことはいうまでもない。しか